19 世紀開港場ピジンの語彙論的分類と分析
ー起源言語と語彙形成に注目してー

西沢　雅代

1. はじめに

日本は 1854（安政元）年の所謂黒船の来航から 1858（安政 5）年「安政の五カ国条約」を経て、1859（安政 6）年に長崎、横浜、函館、神戸、新潟の 5 港が開港することになった。横浜では開港にともない居留地がつくられ、そこに多くの外国人や日本各地からも人々が集まり、港町ならではの多民族社会を形成した。開港当初の横浜居留地の規模は約 1 平方キロメートルで日本に設けられた開港場のなかでは最大級であった。横浜居留地内ではことばのわからない日本人と外国人が接触することによりピジン語が発生した。ピジン（pidgin）とは共通の言語をもたない人々のあいだに起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な（marginal）言語である（Todd 1974 田中（訳）1986：5）。横浜居留地で使われたピジン語は日本語をベースとしたピジンとして唯一知られている。このピジンを外国人は Yokohama dialect, Yokohama Japanese, Yokohamaese などと呼んでいたが本稿では横浜ピジンとする。横浜ピジンの文字資料は言語接触によって発生した語を欧米人が聞き取って文字化したものなので日本人にとって読みにくいものが多い。

本稿ではまず、横浜ピジンの代表的文字資料である「Exercises in the Yokohama Dialect（Atkinson 1879）」（以下 EYD とする）に記載されている 168 語を起源言語と語彙形成に注目して分類表を作成し、その分類表を基に語彙表を作成する。そして横浜ピジンの文字資料のどのような点が日本人にとって読みにくいのかを EYD の表記に注目して考察する。

2. 先行研究

EYD は横浜居留地で生活する外国人と日本人とのコミュニケーションの際に参考になるようにと外国人向けに編纂された 31 ページほどの小冊子である。カイザー（1998）は EYD を用いて横浜ピジンについて語彙の大半が多義語である、語順が安定している、活用はないか少ない、などピジン語の特徴について記述し、それが日本語をベースとしたピジン日本語であることを明らかにした。ロング（1999）は横浜ピジンの語彙をいくつか取り上げ、それらが日本人同士のことばに入り込み、全国共通語や地域の日本語となって残存していると述べている。また、Daniels（1948）は EYD を用いて横浜ピジンの語源的分析をおこなっている。Daniels（1948）の語源の分類法はまず全体の語を記述してから、次のように英語を中心とした 12 項目に分類している。

1. 標準英語（例：charms, come here）
2. 海外英語（例：boy）

3. 東洋英語（例：amah）
4. インド英語またはピジン英語（例：bobbery）
5. ピジン英語（例：num wum）
6. ピジン英語と海上マレー語（例：byenbai）
7. マレー語（例：piggy）
8. フランス語（例：chapeau）
9. 日本語と英語の混合（英語のスラング、ピジン英語を含む）
（例：baby san, beer sacky, kireen, chobber chobber, jiggy-jig）
10. 日本語に訳された英語のスラング（例：hahdykesan, homura square oh）
11. 日本語？オーストラリアピジンの影響（例：caberra mono）
12. 日本語（スラングを含む）（例：high kin, maro maro, shiroy）

（筆者抄訳）

Daniels（1948）ではこのような語源的分析によって80～85%が日本語起源の語であると述べられているが、日本語起源の語彙が開港以前から日本人同士で使用されていたか否かについては記述されていない。

本稿ではEYDに関してDanielsの分類とは異なる起源言語の分類と分析をおこなうことで、Daniels（1948）では示されていない開港後に使われ始めた語についても考察する。

3. 「Exercises in the Yokohama Dialect（Atkinson 1879）」の語源分類表

日本は250年以上に渡り鎖国政策を行ってきたことから、開港前、出島があった長崎を除いて日本人はほぼ日本語だけを使って生活していた。開港後、西洋の文化や生活様式とともに外国語が居留地の日本人の生活に入り込んできたと考えると、日本語以外のことばは開港場である居留地で使われ始めたのではないかと考えられる。そこで図1では最初にEYDの語を日本語起源のものと外国語が含まれているものを外国語内包として分類した。さらに日本語起源で元々日本語として使われていた語を既存語とし、日本語と日本語を組み合わせた語を造語として下位分類した。外国語内包では英語、中国語、マレー語などの単一言語起源の語と日本語と英語、日本語と中国語のように、日本語と外国語で語を形成しているものを複数言語起源として下位分類した。

Exercises in the Yokohama Dialect　語源分類表

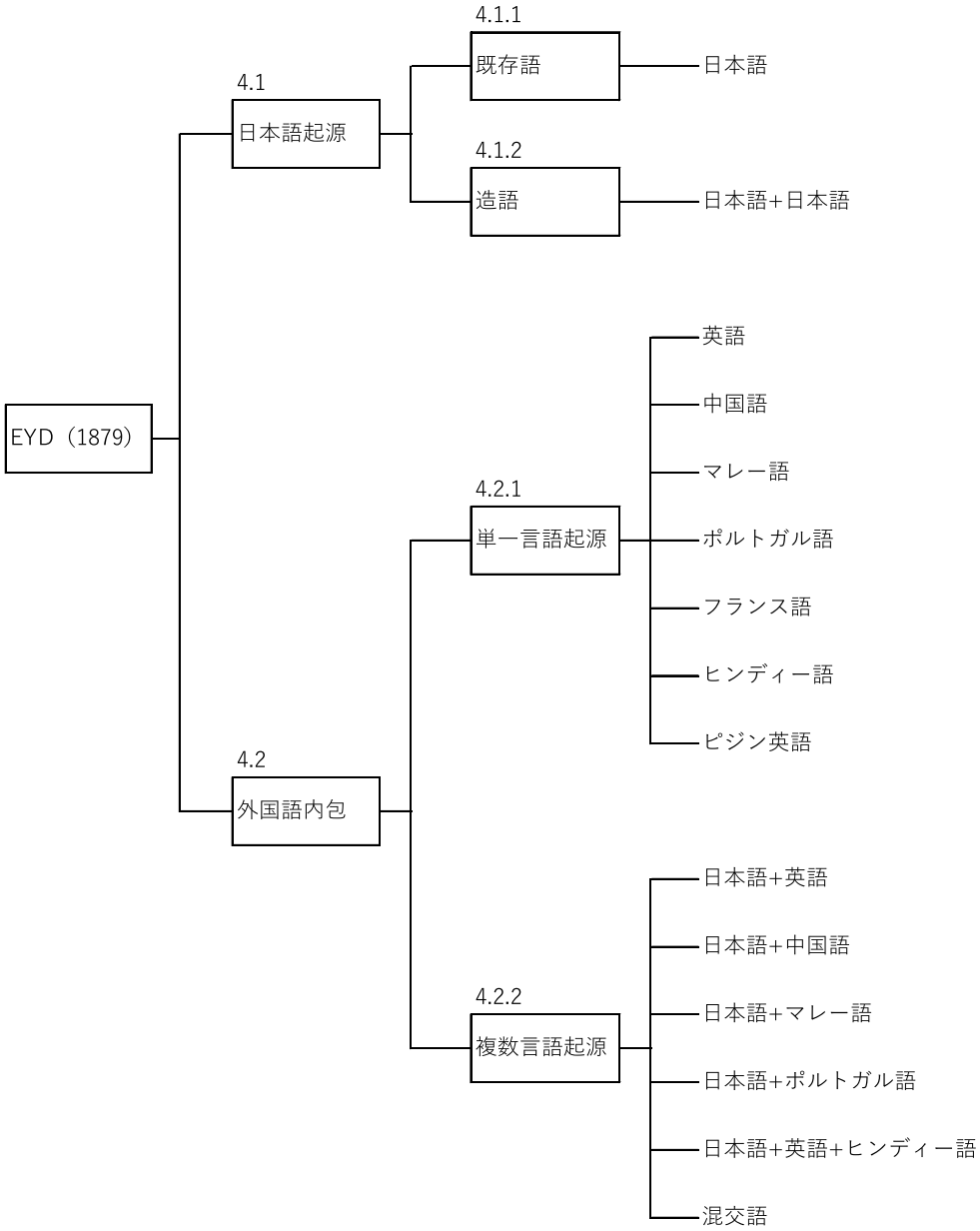

図１　EYD の語源分類表

4. 語彙表による分析と考察

図1に基づき、既存語、造語、単一言語起源（英語、中国語、マレー語、ポルトガル語、フランス語、ヒンディー語、ピジン英語）、複数言語起源で語彙表を作成した。EYD記載語欄と英語表記欄はEYDからの転載である。EYD記載語欄（　）内に起源語と考えられる語を記載し、英語表記欄（　）内には筆者が和訳したものを記載した。

4.1　日本語起源

4.1.1　既存語（117語）

開港前から日本人が使用していた既存の日本語を既存語とした。既存語に分類した語は現代の我々の使用語彙または理解語彙でもある。その記載の方法はいくつかに分類できる。本稿では紙面に限りがあるので特徴的な13語について考察する。まず、表1の項目番号の1番、2番、3番はヘボン式ローマ字で書かれたものなので、現代の我々でもEYD記載語を見て理解できる。次に4番、5番、6番は日本語の発音に類似する英単語に置き換えている語である。表2のように記載語worry[wʌri]と起源語「わるい」[warɯi]では発音は似ているが、日本人にはworryの表記から「悪い」は推測しにくい。このような異表記の語が横浜ピジンではよく見られるので、日頃からローマ字読みに慣れている日本人にはかなり読みにくい。母音と綴り字の関係については5.3 母音と綴り字で詳しく分析する。7番、8番、9番はピジン語の特徴の一つである多義語（カイザー 2010）だが、元々の日本語の意味は失われていない。また9番は「おはよう」は発音が似ているアメリカの都市Ohioで代用している。10番と11番は開港以前には日本になかったclergyman（聖職者）をbosan（坊さん）、church（教会）をoh terror（お寺）と似ている意味を持つ語で代用しているために意味のずれが生じている。12番は一つの語に対して複数の表記がある例である。12番については5.2 一貫性の欠如で詳しく分析する。13番のshin dan jeeは英語表記がdead（死ぬ）となっていることとshin danのローマ字読みから「死んだ」の可能性が考えられる。jeeについては不明であるが、本稿では日本語起源として既存語に分類した。

表1　既存語

項目番号	EYD記載語（起源語）	英語表記（和訳）
1	mado（窓）	window（窓）
2	mon（門）	gate（門）
3	tempo（天保銭）	penny（お金）
4	am buy worry（塩梅悪い）	illness（病気）
5	bates（別）	other（別、別の）
6	coots（靴）	shoes（靴）boots（ブーツ）

7	aboorah（油）	butter（バター）　oil（油） kerosene（灯油）　pomatum（潤滑油） grease（グリース）
8	arimas（あります）	to have（持つ、ある） will have（持つだろう、あるだろう） has had（持っていた、あった） can have（持つことができる） to obtain（入手する） to be（～になる） to wish to be（～になりたい） to be at home（家にいる） to arrive（着く） to want（ほしい）
9	Ohio（おはよう）	How do you do? (初めまして） Good morning(おはよう） Good day（こんにちは） Good evening（こんばんは）
10	bosan（坊さん）	clergyman（聖職者）
11	oh terror（お寺）	church（教会）
12	skoshe, skoshee, skosh　（少し）	little（少し）
13	shin dan jee　（死んだ　じい？又はしんだんち）	dead（死ぬ）

表２　記載語と起源語の表記と発音

記載語と発音	起源語と発音	英語表記
worry　［wʌri］	わるい　［warɯi］	bad
bates　［beits］	べつ　［betsɯ］	others
coots　［ku:ts］	くつ　［kɯtsɯ］	shoes boots

4.1.2　造語（日本語＋日本語）（21 語）

造語に分類した語は日本語と日本語を組み合わせることによって元々の日本語の意味とは異なる新しい意味を作り出している。まず 14 番、16 番、23 番 sto 及び 25 番、30 番では shto に着目すると、これらの英語表記は 14 番が he（彼）、his（彼の）、theirs（彼らの）、16 番が soldier（兵士）、23 番が inspector（検査官）、25 番が auctioneer（競売人）、30 番が ambassador（大使、使節）となっている。これらはすべて人物である。従

って sto 及び shto は人だと考えてよいであろう。表記が hito ではなく、sto（人）になっているのは関東訛り、特に江戸言葉の特徴である「ひ」と「し」の交代と母音の無声化のためだと考えられる。14 番の acheera sto（あちら＋人）が彼、彼の、彼らのという意味で使われていたのは当時の日本人には「彼」という概念はなかったので、「あちら」と「人」で表したと考えられる。15 番の ah me kass（雨＋傘）では英語表記が umbrella（傘）なので kass は母音 a が脱落しているが傘だとわかる。16 番は開港当時に駐留していたイギリス兵が赤い服を着ていたことから soldier（兵士）を ah kye kimono sto（赤い着物＋人）と呼んでいた（伊川 2005:46）。18 番の berrobo-yaru（べら棒＋やろう）では yaru（やろう）、19 番の caberra mono（被る＋もの）では caberra の EYD 記載語をローマ字読みで読むと（起源語）と一致しない。22 番の hahdykesan(歯＋大工＋さん)は歯と大工さんを組み合わせることで歯医者という意味で使われていた。「歯」と「大工さん」はそれぞれの意味では既存語になるが、それらを組み合わせることで全く異なった歯医者という意味を作り出している。25 番の selly shto（競り+人）の selly は sell（売る）と競りの両方の可能性が考えられる。29 番の tent sam kass（天道＋様＋傘）では sam が「さん」と「さま」のどちらの可能性もあるが、kass で語尾の a が脱落していること、21 番の eejin san（異人＋さん）では san が「さん」であることから、sam は「さま」の a が脱落した形と考えられる。造語に分類した語は、鎖国時代にはなかった語を表すのに日本語を組み合わせたと考えられる。そのためこれらは日本語と日本語の組み合わせであるが、開港前の日本人同士では使われていなかったと推測できる。また 31 番の jiggy-jig は「直（に）」と「直々」の語源の可能性がある。「直（に）」は英語表記の to hasten（急いで）、hurry!（早く）と意味が一致する。「直々」は「直接」の意味で英語表記とは意味異なることから本稿では「直（に）」を語源として造語に分類した。32 番の maro maro は「回る」が語源で意味は「歩く」に変化している。ともに日本語起源であるが、日本人同士が jiggy-jig や maro maro を使っていたとは考えにくいので造語に分類した。33 番の eejin san shin dan jee tokoro（異人さん＋死んだ ＋所）の jee と 34 番の shin danji ooshie abake-mono（死んだ＋牛＋おばけもの）の ji とに着目すると、ee は「イ」（eejin＝異人）なので jee も「ジ」と読める。また、ji はローマ字読みで「ジ」と読める。従って、shin dan jee と shin danji は異表記の関係であると推測できる。次に ooshie は「牛」で、abake-mono は英語表記の ghosts（おばけ）から「おばけもの」であると推測できる。造語に分類した語は日本語で形成された語であるが、日本人同士で使っていたとは考えにくく、開港してから横浜居留地で使われ始めたと考えてよいであろう。

表３　造語（日本語＋日本語）

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
14	acheera sto　（あちら＋人）	he（彼）　his（彼の） theirs（彼らの）
15	ah me kass（雨＋傘）	umbrella（雨傘）
16	ah kye kimmono sto （赤い着物＋人）	soldier（兵士）
17	ato mono（あと＋もの）	crupper（しりがい＝馬具）
18	berrobo-yaru （べら棒＋やろう）	a“bad hat” （とんでもない人、問題を起こす人）
19	caberra mono（被る＋もの）	hat（帽子）
20	eejin san（異人＋さん）	foreigner（外国人）
21	fooratchi-no-yats （ふらち(な)＋人）	loafer（いい加減な人）
22	hahdykesan （歯＋大工＋さん）	dentist（歯医者）
23	high kin sto（拝見＋人）	inspector（検査官、検閲官）
24	matty toky　(待って＋時計)	stop watch（ストップウォッチ）
25	selly shto（競り＋人）	auctioneer（競売人）
26	shiroy mono（白い＋もの）	starch（でんぷん）
27	tacksan hanash bosan （たくさん+話＋坊さん）	officiating priest（司教）
28	tates yakemas （鉄？＋焼けます）	fry（揚げる）
29	tent sam kass （天道+様＋傘）	umbrella（日傘）
30	yakkamash shto （やかましい＋人）	ambassador（大使、使節）
31	jiggy-jig（直）	to hasten（急いで） hurry! be quick（早く）
32	maro maro（まわる）	to pass（通過する） to walk（歩く） to be not at home（外出する）
33	eejin san shin dan jee tokoro （異人さん＋死んだ＋所） or bohm san koorah (坊さん＋蔵)	foreign cemetery　（外人墓地）

34	shin danji ooshie abake-mono （死んだ＋牛＋おばけもの）	ghosts of departed cattle （死んだ牛のおばけ？）

4.2　外国語内包

4.2.1　単一言語起源

単一言語起源では英語、中国語、マレー語、ポルトガル語、フランス語、ヒンディー語を起源とした語にピジン英語を加えて分類した。起源について諸説ある amah（ロング 1999）、shabone（伊川 2000）については＊を付け、それぞれ語源の可能性がある起源語に記載した。但し、集計では 1 語に数えた。これらの外国語は日本が長い間の鎖国状態で外国との交流がなかったことを考えると開港後、外国人が日本に持ち込み使われ始めたと考えてよいであろう。但し、ポルトガル語に関しては 16 世紀にキリスト教布教のためにポルトガル人が来日した際にポルトガル語を持ち込んでいることから鎖国中も使用されていた可能性も考えられる。

①　英語起源（5 語）

36 番の boy（boy）は一般的に和訳される少年という意味ではなく、servant（召使い）として使われていたことが英語表記からわかる。37 番の come here（come here）は dog（犬)という意味で使われていた。これは外国人が犬に”come here”と呼ぶのを聞いた日本人が、犬そのものを「カメヤ」と誤解した（伊川 2005:83）。日本人の「カメヤ」を聞いた外国人にも dog（犬）が come here＝「カメヤ」として逆に浸透していったと考えられる。来日した多くの外国人は欧米人であったことを考えると英語起源の語が 5 語というのは少ないように思えるが、チェンバレンは中国では中国人がピジン英語を使っていたが、日本では事情が逆で「初めてこの国に来た人びとは、何かしてもらいたい時には、車夫や女中に分からせるために、この言葉をすぐに覚える（Chamberlain 1988:141）。」と外国人が日本人とのコミュニケーションでピジン日本語を使っていたことについて言及している。

表 4　英語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
35	boto（boat）	boat（船）
36	boy（boy）	a servant（召使い）
37	come here（come here）	a dog（犬）
38	so so（sew）	to sew（縫う） to mend（繕う）or make clothes（服を作る）
39	amah（amah）＊	nursemaid（乳母、子守女）

② 中国語起源（2 語）

40 番の mar は中国語の発音が[maa[5]]であることから中国語起源にしたが、日本語の「馬」の「う」が脱落した可能性もある。当時、横浜居留地には西洋商人の買弁（使用人）として多くの中国人が来日していたにもかかわらず中国語起源の語が非常に少ない。これは来日した中国人には通訳としての役割が期待されていたため、西洋商人や日本人との会話で日常的には中国語を使用していなかったためだと考えられる（西川他 2002:64）。

表 5　中国語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
40	mar（馬）	horse（馬）
41	amah（阿媽）＊	nursemaid（乳母、子守女）

③ マレー語起源（4 語）

42 番の piggy(pergi＝出て行け)はピジンの特徴の一つである多義語である（カイザー 2010）。この piggy はペケとなり、44 番の pumpgutz はポンコツとなって現代の共通語として定着している。これらは東アジアや西大西洋での貿易を通して起こった接触言語に関わっていたマレー人と接触があった欧米人によって持ち込まれたと考えられる（ロング　1999）。

表 6　マレー語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
42	champone （canpur＝混ぜる）	to mix（混ぜる）
43	piggy （pergi＝出て行け）	to remove（取り除く） take away（取り上げる） carry off（持ち去る） clear the table（机をきれいにする） get out of the road（道から外れる）
44	pumpgutz （pungut＝手にする）	punishment（処罰、虐待） to punish（罰する）
45	serampan （sarampang＝破棄する、捨てる）	to break（壊す）

④　ポルトガル語起源（3 語）

ポルトガル語は 16 世紀のキリスト教伝来の際にポルトガル人が来日しているので、その当時に持ち込まれていた可能性がある。48 番の shabone（sabão＝石鹸）は 1543 年にポルトガル人によって持ち込まれ、その頃から日本人にシャボンと呼ばれていた。しかし江戸時代の鎖国により輸入が途絶えた。開港後は 1877 年頃から広く使われ始めた。明治初期の漢語重視の風潮によって「石鹸」という表記が多用されるようになったが、シャボンと振り仮名が付されるのが普通であった。明治時代後半になって漢字表記に基づく「せっけん」にとってかわった（伊川 2000:239）。

表 7　ポルトガル語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
46	pan（pão=パン）	bread（パン）
47	amah（ama＝乳母）＊	nursemaid（子守女、乳母）
48	shabone（sabão＝石鹸）＊	soap（石鹸）

⑤　フランス語起源（2 語）

49 番の shabone（savon＝石鹸）は④ポルトガル語起源で述べたように、16 世紀にポルトガル人によって輸入されていたが江戸時代鎖国政策により輸入が途絶えた。横浜居留地においては開国後、横須賀製鉄所にいたフランス人から石鹸をもらった日本人の堤磯右衛門が石鹸製造所を創業し販売を始めた（伊川 2000:239）ことからフランス語起源にも記載した。フランス語に関しては複数起源語の可能性がある shabone を除けば 50 番の chapeau のみということになる。

表 8　フランス語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
49	chapeau（chapeauw＝帽子）	hat（帽子）
50	shabone（savon＝石鹸）＊	soap（石鹸）

⑥　ヒンディー語起源（1 語）

51 番の bobbery（bãp re＝お父さん）はインド洋や東インド諸島のピジンとして使用された語（ロング　1999）だが起源語と英語表記に意味のずれがある。

表 9　ヒンディー語起源

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
51	Bobbery（bãp re＝お父さん）	disturbance（騒がしい、うるさい） noise（騒音）

⑦　ピジン英語（4 語）

当時、インド洋や大西洋を往来する船乗りや中国国内で使われていたピジン語が来日した欧米人や中国人によって持ち込まれたと考えられる。52 番の bynebai（by and by）、54 番の num wun（number one）はチャイニーズピジン英語でも使われていた（Hall 1944）。53 番の chobber chobber はチャイニーズピジン英語の chow chow（食べる）や caw caw（食べる）と関連している可能性がある。また日本人が使っていたチャブ（食べる）にも関連している可能性がある。

表 10　ピジン英語

項目番号	EYD 記載語（起源語）	英語表記(和訳)
52	Bynebai（by and by）	by and by（だんだん、徐々に）
53	chobber chobber（chow chow）	food（食べ物、食べる）、sustenance（食物）
54	num wun（number one）	the best（一番）
55	sick-sick（sick）	illness（病気）

4.2.2　複数言語起源（12 語）

複数言語起源では日本語と英語、日本語と中国語など、日本語と外国語で形成されている語を分類した（起源が諸説ある語＊については集計時に 1 語として数えた）。日本語と英語の組み合わせでは 56 番の baby san（baby＋さん）が赤ちゃん、57 番の baby san bashaw(baby＋さん＋馬車)は乳母車の意味である。現代の日本人が聞けば、baby san は赤ちゃんのことだと想像できるが、当時の横浜居留地に住んでいたほとんどの日本人は、英語がわからなかったので、baby=赤ちゃんとは結び付かなかったと考えられる。60 番の doctorsan (doctor＋さん)の san ローマ字読みで「さん」、61 番の dora donnyson (dollar＋donnyson＝だんなさん)の son[sʌn]は「さん」に近い発音になるので san と son は同じ意味を持つ異表記の関係と考えられる。66 番の fooney high kin　serampan nigh rosokoo(船＋拝見＋sarampang＋ない＋ろうそく)の英語表記は lighthouse（灯台）であることから、ろうそく（灯り）がないと船が壊れてしまうという意味が推測できる。69 番の kireen は日本語の「きれい」と英語の clean が混交して一語を構成している。これらの語のすべ

てに外国語が含まれているので、開港前から日本人が使用していたとは考えにくい。従って開港後、横浜居留地で使われ始めたと考えてよいであろう。

表 11　複数言語起源

項目番号	起源言語	EYD 記載語（起源語）	英語表記（和訳）
56	日本語＋英語	baby san（baby＋さん）	a child（赤ちゃん、子供）
57	日本語＋英語	baby san bashaw（baby＋さん＋馬車）	perambulator（乳母車）
58	日本語＋英語	beer sacky（beer＋酒）	beer（ビール）
59	日本語＋英語	chi chi amah（乳＋amah）＊	foster mother（養母）
60	日本語＋英語	doctorsan（doctor＋さん）	physician（医者）
61	日本語＋英語	dora donnyson（dollar＋donnyson＝だんなさん）	banker（銀行員）
62	日本語＋英語	Kooksan（cook＋さん）	cook（コック、料理人）
63	日本語＋中国語	champone yakemas（チャンポン＋焼けます）	stew（煮込む）
64	日本語＋中国語	chi chi amah（乳＋阿媽）＊	foster mother（養母）
65	日本語＋中国語	Nankinsan（南京＋さん）	Chinaman（中国人）
66	日本語＋マレー語	fooney high kin　serampan nigh rosokoo（船＋拝見＋sarampang＋ない＋ろうそく）	a lighthouse（灯台）
67	日本語＋ポルトガル語	chi chi amah（乳＋ama）＊	foster mother（養母）
68	日本語＋英語＋ヒンディー語	consul bobbery sto（consul＋bãpre ＋人）	lawyer（弁護士）
69	混交語	kireen（きれい＋clean）	clean（きれい、きれいに）

今回、EYD の起源言語と語形成に注目して語彙の分類をおこなったところ、日本語として開港前から日本人が使用していた既存語は 117 語である。これらは開港前からあった語なので横浜居留地で使われ始めた語ではない。次に日本語起源であっても日本語と日本語で形成された造語 21 語は開港以前の日本になかったものを表していたり、また現代の日本人の使用語彙でもないことから、横浜居留地でコミュニケーションのために使われた語だと考えられる。外国語内包については 30 語のすべてに外国語が含まれているので開港後、横浜居留地で使われ始めたと考えてよいであろう。つまり EYD 記載語 168

語のうち、既存語の117語（70%）が開港前から使われていた語で、それ以外の51語（30%）が横浜居留地で使われ始めた語であるという結果を得た。

5. 横浜ピジンの表記の考察

横浜ピジンの文字資料はピジンが文字化された資料である。その文字資料のひとつである EYD では口頭でしか使われていなかったピジンを文字化するために様々な工夫がなされている。しかし外国人のために作られた小冊子なので日本人にとって読みにくいものも多い。どのような点が読みにくいのかを４.語彙表に着目して考察する。
（番号は４. 語彙表の項目番号による）

5.1 ミスプリント

EYD には単なるミスプリントと思われる語がある。例えば flat 11on という英語表記がある。11 が数字の 11 か、アルファベットなのかもわからない。EYD 記載語は shin nosey である。shi を江戸言葉の特徴である「ひ」と「し」の交代が起こった形だと考えると「火熨斗（ひのし）」と読むことができる。そして「火熨斗（ひのし）」ならば英語表記は flat iron（アイロン）ではないかと推測できる。つまり 11 はミスプリントだった可能性が高い。

5.2 一貫性の欠如

EYD には一つの意味で複数の表記がある語がある。例えば、12 番の英語表記 little（少し）は EYD 記載語では skoshe だが、他にも skoshee, skosh という表記が確認できる。また「人」も sto と shto の 2 種類の表記がある。このような一貫性のなさは当時、ヘボン式ローマ字や訓令式ローマ字のような正書法がなかったこと、無声化が起こる場合とそうでない場合があること、単なる表記法の揺れなどが理由として考えられる。このような一貫性の欠如も読みにくさの要因になるであろう。

5.3 母音と綴り字

4 番の am buy worry（塩梅悪い）の英語表記は illness（病気）である。4 番以外にも EYD の中で worry は bad（悪い）と英訳されている。worry では日本語のア段への対応にアルファベットの o を使っている。この単語は EYD の中に 7 か所出現するので、ミスプリントではないであろう。例えば、am buy worry arimas?（Is he ill?/彼は具合が悪いですか）や obee worry arimas（This girth does not appear very strong/鞍の腹帯はあまり丈夫ではなさそうだ）がある。これはおそらく「帯　悪い　あります」である。このように横浜ピジンではニーモニック法（mnemonics、すなわちピジンの単語を記憶しやすいように既存の英語に見立てている方法）がよく用いられる。worry は[wʌri]と発音される。/ʌ/は日本語の母音「ア」に近い。同様に英語表記 to buy（買う）は EYD 記載語では cow で[kɑʊ]と発音される。こちらも/ɑ/は日本語の母音「ア」の発音に近い。英語と日本語では母音

の数が異なるため、英語では綴り字が o でも発音は日本語の「ア」の音に近い/æ/,/a/,/ʌ/,/ɑ/,/ɒ/などの母音が存在する。EYD の著者は音で判断して「わるい」の音に近い英単語を探した結果、worry にたどり着いたと考えられる。このように日本語の語を英単語で代用することは外国人にとっては発音がしやすかったであろう。しかし日本人にとっては読みにくさの要因になっているのである。

5.4　スペースの空け方

横浜ピジンのアルファベット表記では 1 つの単語なのにスペースが空いていることがある。これにはいくつかの理由が考えられる。まず oh my（おまえ）、tack san（たくさん）、die job（大丈夫）のようにニーモニック法を使用している場合である。日本語 1 語に対して 2 語以上の英単語を使用する場合に通常の英語表記のようにスペースを空けている。次に誤読を防ぐためである。例えば、2 番の ah me kass は英語表記が umbrella（rain）になっていることから「雨傘」である。もし ah me を ame とつなげた場合、外国人、特に英語母語話者が[eim]や[ami]と誤読してしまう可能性がある。最後に聞こえたとおりに綴った可能性である。15 番の ah kye kimmono sto をみると、ah kye は EYD に 4 回出現しているので、ミスプリントではないであろう。EYD の中で ah kye の英語表記は red となっているので起源語が「赤い」ということがわかる。日本語の「赤い」は 1 つの単語だが、EYD の綴り字にはスペースが入っている。ah kye kimmono sto の起源語は「赤い　着物　人」であろう。日本人にとってはこれが 3 つの単語だというのは当然のことである。しかしピジンのような自然習得の場合、単語の境界線がわからないため聞こえたとおりに綴ったと推測できる。いずれにしてもスペースを空けることで外国人には読みやすくなっているが、日本語では通常 1 つの単語の中にスペースを空けることはないので日本人にとっては読みにくいだけでなく、起源語を推測することも難しくしている。

5.5　造語

造語は日本語と日本語の組み合わせであるが、起源語とは異なる意味になるので日本人には読みにくいのと同時に意味も理解しにくい。例えば、hahdykesan（歯+大工さん）のように綴り字を読むことが困難な上に意味もわからない語もある。また、21 番の high kin sto も「拝見」と「人」が何を表すのか英語表記を見なければわからない。

上記のように横浜ピジンの文字資料には日本人にとって読みにくい要因が散見しているのである。

6.　まとめと今後の課題

本稿では横浜ピジンの代表的な文字資料 EYD の語源を分類し、独自の語源分類表と語彙表を作成した。Daniels（1948）では 80%～85%が日本語起源であると述べられていたが、Daniels とは異なる分類をして考察した結果、EYD からの分析では開港前から使われていた日本語は 70%で 30%は開港後に使われ始めたものであろうという結果を得ることができた。日本語起源の中でも開港前から使用されていた語と、開港後に使われ

始めた造語（日本語+日本語）に分類できることがわかった。また、語源の分類、分析から横浜ピジンの文字資料の読みにくい理由のいくつかを指摘することができた。

本稿では横浜ピジンの文字資料として EYD のみを分類して考察を行ったが、カイザー（2010）が指摘したように EYD の他にも横浜ピジンを掲載した文献が複数ある。今後はこれらの文献を調査することにより、横浜ピジンの語源、表記、発音など多角的に研究を進めたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、ご指導していただいたロング・ダニエル先生はじめ協力していただいたロングゼミの皆様に心より御礼を申し上げます。

参考文献

伊川公司（2000）『ハマことば』神奈川新聞社

伊川公司（2005）『横浜・ハマことば辞典』暁印書館

カイザー・シュテファン（1998）「Yokohama Dialect-日本語ベースのピジン-」『国語研究論集』汲古書店

カイザー・シュテファン（2010）『横浜ピジンのデータベース化とデータベースを用いた簡略日本語表現の研究』
http://hdl.handle.net/2241/107785　2019 年 12 月 1 日アクセス

亀井秀雄（2000）「一八六〇年代・横浜雑居ことばについて」『北海道大學文學部要』48(3)、pp93−139

西川武臣・伊藤泉美（2002）『開国日本と横浜中華街』大修館書店

ロング ダニエル（1999）「地域言語としてのピジン・ジャパニーズ　―文献に見る 19 世紀開港場の接触言語―」『地域言語』11　pp1-10

Atkinson, Hoffman (Bishop of Homoco) (1879) *Rivised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect*　Yokohama print

Chamberlain, Basil Hall (1890) *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan* (チェンバレン, バジル ホール 高梨健吉 (訳) (1988) 日本事物誌 2 平凡社)

Daniels, F J (1948) The Vocabulary of the Japanese Ports Lingo. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies Volume XII: Parts 3 and 4*　The School of Oriental and African Studies,

Hall, Robert A. Jr. (1944) Chinese Pidgin English Grammar and Texts. *Journal of the American Oriental Society Vol.64 No3(July-Sep. 1944) pp95-113* American Oriental Society

Todd, Loreto (1974) *Pidgins and creoles*. London and New York: Routledge and Kegan Paul Ltd. (トッド, ロレト 田中幸子 (訳) (1986) ピジン・クレオール入門 大修館書店)

（にしざわ　まさよ・首都大学東京大学院博士前期課程）